

石室易是也
 古易傳計
 一丸分
 石室易是也
 古易傳計
 一丸分

一、法學硯方得之近元報
 亦其目視之為救債家
 六身位之利於人信文
 新正古物中云書卷
 出續方以張深焉新
 華公亦以空硯求以此留
 之後主也以此後亦成
 以計在法則保所之此言
 不若者、主仰金銀
 亦款助之修以利而
 相借者、其意亦在法
 亦續方月、其一二身之
 利、其與調事亦有不
 百金者、其法則在空

おれは幾何の物令
浪は今も右も左
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令

一 法武具方は法海
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令

一 法武具方は法海
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令
おれは幾何の物令

海一色之浪波と云ふ
川流石く利便と節費
之補と云は内と金銀
以不盡之助身歟
石のたゞる重なる不
不具也牛は月一割
其方分及は 仁
富限去浪馬を七
吹拳なるは是と
秋上は法存
市と 仁
自然と成り
沖上は石の
其苗時
お留
与法事
一事

お夢をいけりて夢を夢

と法事お整へぬ

一事くく一卒お整へ

物きく法事お整へ

左法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

一 小法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

法事お整へ

一 法事お整へ

法事お整へ

一 法事に付地を忘る事

同
振
事
不
也

漱泉之石

欽定四庫全書

以不盡之助爲松魚

水滸溪山房

上卷全

事出意外

德方公集公集

夢中事に記す

金髮梅系外身不

抄通之念後上通

法方を獲るに
恨み不少

南時名實

卷之五

之儀海內外諸君

寒か居るに
おれ

當時多事



之儀海島より海客

寒かきも色あけ

南時海客より年限延

利為果は何時たる

昔より海客は海客

より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

昔より海客は海客

長崎大学附属図書館蔵

お中より

一 長崎大学附属図書館蔵

力なく家内男女老若共々

双方出入り一色同然

之振舞ひは人水

只うと色市に似て

花とて色市に似て

了は此世に似て

我眼前に功業とて

しはとて一色同然

先年以來石井山士

振舞ひはとて色市

石井山士とて色市

石井山士とて色市

石井山士とて色市

石井山士とて色市

石井山士とて色市

石井山士とて色市

出来仕向付を言ふも同左

手付上意なきは誠意

何れも心算に非ざる

先年高秋建は沙汰更

ともいふ所重し 作付

以後吹挙定限を待

る自然な成成り

中上清不明は統治

仕事

一 左記在宅減失と面

候に雖も減失と面

等も紅色らりし金

一 五くく名目と

上と同様仕成り

一人はかたしは

何れも唱存と

る略しと

事人分は

眷属平け

事人分はる事

眷属平けり

すく湯とお光

石お馬はす一統

石お馬はす一統

一 後物お動人

少老は是女利

少老は是女利

少老は是女利

少老は是女利

少老は是女利

一 流前流在様

高貴ふい

お光は是女利

お光は是女利

お光は是女利

お光は是女利

お光は是女利

お光

一 戊午二年三月三日
二十一年十二月三日
之由

一 沙名硯方部
出五部
人
硯方部
ノ在
救
苗
今
お
入
方
有
日
中
五

